

埼玉工業大学での教育と研究とを振り返る

岡本 光生

1 略歴

ある中国人はわたしについて次のような紹介をしている。わたしの仕事を理解するのに必要にして十分な条件を備えているので以下に示す

岡本光生（1949年～）哲学碩士。埼玉工業大学教授。中国古代経済思想研究家。

白鳥庫吉が卒業し、津田左右吉が教鞭をとった旧制中学の系譜を受け継ぐ高校を卒業したことを中国研究者としては付け加えておきたい。

2 教育の面で

森三樹三郎氏の「死の象徴としての阿弥陀仏」という講演記録を読んでいたら一遍上人のこんな話が目に飛び込んできた。以下は森氏の本からの引用である。（同氏著「老荘と仏教」279頁 講談社学術文庫1631）

一遍が道行の旅に出て、会う人毎に念仏札、つまり極楽ゆきの切符を配って歩きました。あるとき、高野山から熊野に出る途中で一人の僧に会い、「一念の信心を起こして南無阿弥陀仏と称えて、この札を受け給ふべし」といって念仏札を渡そうとしたところ、その僧は「いま一念の信起こり侍らず。受くれば妄語なるべし」と答えて念仏札を拒絶した。これには一遍も大きなショックを受けたのであります。

もっと俗なことでいえば、選挙のたびに候補者が駅前でビラを配り、演説をする。ほとんどの人はビラも受け取らず、演説も聞かずに通り過ぎる。こんな光景を目にすると、わたしなどとても選挙に立候補するなどできな

いな、となかば感心するのだが、ふと振り返ると、わたしも35年間この一遍上人や候補者と同じことを行い、同じ目にあっていたといえるかもしれない。

英語の単語調べをしたり、実験のレポート書きをしていたり、なかにはなにを見ているのか、ケイタイやパソコンの画面をじっと見入っていたり、そんな学生のいなかった講義はほとんどなかった（もちろん、すべての講義において、すべての学生がそうであった、というわけではない）。

とはいうものの教育に従事しながら、まったく知的刺激を受けなかったわけではない。もう20年以上も前のことになろうが、「きみが不思議に思うこと、疑問に思うことを書け」という無茶苦茶な問題に、「全能にして永遠なる存在である神は自殺することができるであろうか？」と答えた答案があった。永遠だから死にはしない、死ぬことができない。全能だから自殺もできる、自分を消滅させることができる、自分自身を否定することができる。しかし、 A と $\neg A$ は両立することができるのだろうか。できないはずだ。とすると、「全能にして永遠なる存在」を想定することがおかしいのだろう。いやいや、神様はなんでもできるのだから、矛盾律も平気で破ってしまうのだ…。

これは学生から刺激を受けたことになるから、わたしの「教育上の業績」にはならない。

さきほどの一遍上人の話の続きを書いておこう。

弥陀仏は普く衆生を救うというのにこれを信ぜず、したがって弥陀仏の慈悲から漏れる人間がいることになる。これでは普く衆生に福音を伝えるという一遍の立場が、根本から覆るおそれがあります。

思い余った一遍は熊野神社に参籠して、神のお告げを乞うたところ、熊野権現が現れて「お前の布教の仕方は誤っている。十劫の昔に法蔵比丘が誓いを立てて阿弥陀仏になられたとき、すでに一切衆生の成仏は決定してしまっている。だから信不信を問わず、その札を配るがよい」というお告げがあった。いわゆる十劫成仏の説であります。ここに一遍の時宗では信を必須の条件とせず、不信の者にたいしても、救いの門が広く開かれたわけであります。

こうなると、わたしが学生に「優」を乱発したのも一遍上人の精神に沿っ

ているかもしれない（もっとも、上人ほど、覚悟を決めていないわたしは、試験に欠席した学生には単位はやらなかったし、登録していない学生にも単位をやらなかった）。

教育の面でもう一つ。

最後の一年、人間社会学部情報社会学科に移籍した。講義にはまったく変更はなかったが卒業論文の面倒をみた。それはそれでなかなか楽しいことであって、あるひとりのラグビー部の学生がこんなことを言ってくれた。

ほくら、教室では後にかたまってほんやりしているけれど、その本領はラグビーグラウンドにあるんです。今度、試合を見に来てください。

というわけで、14年の11月9日、埼玉工業大学のグラウンドで行われた対東京工業大学戦を観戦したのだが、学生たちはびっくりするくらい生き生きしていて、当然にも試合は勝利した。これではなんとしても卒論の完成を手助けしてやらねば、と思った次第、これも本学の学生から受けた刺激のひとつだ。

3 研究の面で

田山花袋の「田舎教師」の舞台に近い北関東は岡部の地で、寒風吹きすさぶなか、それでも炬燵に入っていればのんびりすごせると思っていたのだが、基礎教育センターの年上の先生方のなかにえらく研究熱心な方が何人もおられ、これはどうやら勝手が違う、すこしは勉強せねば、ということでものにしたのが以下の論文やシンポジウムでの発表である。

論文（邦文）

- 1 墨家の人間観—尚賢論と兼愛論を中心に—
（早稲田大学文学研究科紀要別冊2 1976）
- 2 戦国末期から漢代初期にかけての墨家の様相—他学派からみた—
（フィロソフィア69 1981）
- 3 孟子における賢のイメージ（CONTEXTURE 教養紀要1 1983）
- 4 墨家の分業論—「商」の観念の欠如に関連して—
（中国古典研究30 1985）

- 5 「交相利」と「交換」—墨家の「交相利」をめぐる—
(CONTEXTURE 3 1985)
- 6 孟子における民の移動の問題 (CONTEXTURE 5 1986)
- 7 荀子における「物」と「欲求」 (CONTEXTURE 9 1991)
- 8 孟子の分業論試論 (CONTEXTURE 10 1992)
- 9 墨子における「財」の交換 (東洋の思想と宗教 9 1992)
- 10 禹水湯旱について (東洋の思想と宗教 12 1995)
- 11 墨子号令篇の文書主義について (CONTEXTURE 19 2001)
- 12 墨子・尚賢上篇の成立時期について—戦国末期成立説の論拠についての疑問— (CONTEXTURE 21 2003)
- 13 墨子・公孟篇の形式論理について (CONTEXTURE 23 2005)
- 14 孔子の陳・蔡・葉周遊—孔子と河南東部文化—
(CONTEXTURE 27 2009)
- 15 墨家の人口論について (CONTEXTURE 30 2012)

論文 (中国文)

- 16 論戦国末期和漢代初期的墨家思想及其他学派对墨家思想の看法
(墨子研究論叢 5 中国墨子学会編 齊魯書社 齊南 2001)
- 17 墨子・号令篇の文書主義
(墨子研究論叢 6 中国墨子学会編 北京図書館出版社 北京 2004)
- 18 墨子・公孟篇中之形式邏輯
(墨子研究論叢 7 中国墨子学会編 北京図書館出版社 北京 2006)
- 19 古代河南の牧畜—關於論語・子路篇の直躬故事—
(河洛文化与閩南文化 河洛文化研究会編 河南人民出版社 鄭州 2008)
- 20 自愛的存在与秩序
(墨子研究 棗庄大学墨子研究所編 中国社会科学出版社 北京 2008)
- 21 墨子・禹水湯旱伝説及其漢代的展開
(職大学報 2008-3 包頭 2008)
- 22 孔子之陳・蔡・葉周遊—孔子与河南東部文化—
(河洛文化与姓氏文化 河洛文化研究会編 河南人民出版社 鄭州 2009)

- 23 墨家経済思想の特色—儒墨比較—（滕州党政信息网 2009）
- 24 上博楚簡「鬼神之明」与「墨子・公孟篇」所見兩段對話 曹峰訳
（墨子研究論叢8 中国墨子学会編 齐鲁書社 齊南 2009）
- 25 欲求与秩序于墨荀
（墨学与和諧世界 河南省墨子学会編 河南人民出版社 鄭州 2009）
- 26 規矩考—墨家的幾何学—
（墨子研究論叢9 中国墨子学会編 齐鲁書社 齊南 2010）
- 27 欲求与秩序—尋求墨家思想根底的人性把握—
（職大学報 2012-6 包頭 2012）

ここでいくつかの論文にコメントを附しておきたい。まだやり残したことがあり（と思いたい）、今後5年くらいでそれをなんとか恰好をつけたいからだ。

1「墨家の人間観—尚賢論と兼愛論を中心に—」、および2「戦国末期から漢代初期にかけての墨家の様相—他学派からみた—」は、「墨子」（浅野裕一 講談社学術文庫1319）の参考文献目録に載っており、また1については柴田昇「墨家集団論序説—墨家思想の再構成—」（名古屋大学東洋史研究報告23 1999）に言及されている。また、墨家の尚賢論の根底にある人間観、社会観がのちの科举制度にまでも通底している、ということで注目をいただいた（福井重雅「漢代官吏登用制度の研究」127頁 創文社 1998）。

4「墨家の分業論—「商」の觀念の欠如に関連して—」および9「墨子における「財」の交換」は山辺進（現二松学舎大学教授）さんが禹域に紹介してくださった（孫中原「墨学与現代文化」第11章 墨学与現代世界文化交流 一 日本的墨学研究 2 主要成果 中国廣播電子出版社 1998）。記して感謝する。

なお4および9については史学雑誌「回顧と展望」号（1993年5月）に、そうはいうものの「墨子」には「関市之利」という表現があるではないか、という批判的なコメントが載っていた。たしかに「関市之利」という表現はあるにはあるが、しかし、男女間の性別による分業を基本とする墨家の分業論において、「関市」という場はいかに位置づけられるのであろうか、位置づけることはできないのではないか、「関市之利」はたんなる「ことばのあや」ではないのか、そんなふうに考えている。

10「禹水湯旱について」、ある大学で陸賈の「新語」、賈誼の「新書」を学生と講読していたときに着想した論文。授業内容が論文に結実したものは二篇あるがそのうちのひとつ。この論文については、おもしろいことに台湾の宋代史の若い研究者が読んでくれている。どうも王安石と司馬光との論争に関連してのようだ。世の中には勉強家もいるものだと感心する（沈宗憲 国家祀典与左道妖異—宋代信仰与政治関係之研究 台湾師範大学博士論文 2000。盧建榮 宋代救災文化研究 中国文化大学碩士論文 2008）

11「墨子号令篇の文書主義について」、軍隊組織では命令が文書で伝達される、だとすれば、戦闘員（小隊長クラス）はある程度文字が読めなくてはならないはずだ、という論文で、日本古代史を研究している若い研究者が引用されていた（渡辺茲 文章を書くこと・読むこと—日本古代における音声言語と書記言語の関係を中心に— 駿台史学126 2005）。軍隊組織と官僚組織は命令の伝達が完全でなければならない、だから文書主義が発達する。また大砲の弾は力学の法則に従うのだから、戦争は基本的に合理的なものだ、軍隊こそもっとも合理的な組織である、と言いたいところだ。「平和主義者 pacifist」の怒りを惹起するかもしれないが。

12、13、14は中国で発表したものの日本語訳、基礎教育センターの雑誌「CONTEXTURE」の継続がやぶまれたので書いたもの。専門の先生たちのなかにはどういうものか、教養の先生たちが研究をすると機嫌の悪くなる方がおられた。それはさておき、日本語で書くと自分の思考の粗さがきわだつ。反省しなければならない。

16「論戦国末期和漢代初期の墨家思想及其他学派对墨家思想的看法」は2「戦国末期から漢代初期にかけての墨家の様相—他学派からみた—」を中国語に訳したもの。儒墨の対立の焦点は、「仁」と「兼愛」との対立にあるのではなく、財の生産や流通といった経済問題にある、というのが拙稿の意図であったのだが、禹域では、拙論の前段の儒家と墨家の共通性の指摘に関心があったらしく、この論文で韓非子が「今儒墨皆称先王兼愛天下、則視民如父母」（五蠹篇）と述べていることを指摘したら、「現代有些海外学者指出：兼愛主張是儒墨共性主張」と拙稿に言及していただいた（曾振宇「論儒墨之相通」 墨子研究論叢7 2006）。拙稿の意図とはややはずれてはいるのだが、禹域において、儒家の「仁」と墨家の「兼愛」との対立、という図式な強固さが、このことからかえってうかがわれる。

18「墨子・公孟篇中之形式邏輯」と24「上博楚簡『鬼神之明』与『墨子・公孟篇』所見兩段對話」は墨子のロジックを扱った。

18では「 P ならば Q 」という命題において P が0かつ Q が1のときはこの命題が成立しているとしてよい、また P が0かつ Q が0のときもこの命題が成立しているとしてよい、と墨家が考えていたことを明らかにした。24の上博楚簡「鬼神之明」では「善人は賞賛される」という命題において、その命題がつねに正しいとすれば、「善人でなくて賞賛されるケース」があってはならないこと、しかし歴史上にそうした事例、 P が1であって Q が0の事例のあったこと、したがって「善人は賞賛される」という命題をつねに成立する命題とは主張できないこと、墨家はこの事態の発見に困惑し、かくて「鬼神之明」は「墨子」書に組み入れられなかったこと、などを論じた。中国の論理学者に注目してもらったし、簡帛研究網（山東大学）にのせられたこともあって、すいぶん引用されている。

なおロジックへの関心は深谷の看護専門学校で「論理学」という授業（「ことばづかい」に気をつける、という自覚を持たせることを目的とした授業を望まれていたように思う）をもったことがきっかけであった。その授業では「肺炎ならば、せきをする。これが正しいとしても、せきをしたら肺炎だ、は正しいとはいえない」という話をした。18は授業内容が論文に結び付いたもうひとつの論文である。

20「自愛的存在与秩序」。反響はないのだが、ほくとしてはおもしろいと思っている論文。最初の主導者による利の一方的供与、そこからはじまる利の相互応酬、その間隙をぬう「free rider ただのり」。「ただのり」防止のための刑罰。墨子の思想を整合的の解釈できると思うのだが。

25「欲求与秩序于墨荀」は荀子と対比して墨子を論じた。荀子論にもなっているはずである。27は「欲求与秩序—尋求墨家思想根底的人性把握—」はその続き。

26「規矩考—墨家的幾何学—」は墨家が水面に糸で三角錐をたらし、言い換えれば物理的方法で直角をつくったこと、つまり直角を定規とコンパスでは作成しなかったこと、別の言葉でいえば、ギリシアの幾何学が三角形から出発しているのにたいし、墨家の幾何学が四角形から出発しているということ、を論じた。山東大学の姜宝昌教授（墨経の専門家）が苦笑いしながら、「読みましたよ」とおっしゃったのには恐縮した。

やり残したこと。墨子の想定する基層社会は「里」である。この「里」の実態を明らかにしていくと、墨子の基底にある発想がみえてくるかもしれない、こんなところが残された課題、ということになる。

著書（一般書）

邦文

- 1 この一冊でわかる中国古典 日本実業出版社 1997
- 2 論語の知恵を身につける本 中経出版 1999
- 3 2時間でわかる韓非子 中経出版 2000
- 4 墨子のパワーを身につける本 中経出版 2000

この4冊あわせて2万部くらいは売れたと思う。まんざらでたらめな本ではないと自分では思っている。

中文

- 6 中国經典一本通 劉錦秋訳 商周出版 台北 2006
- 7 論語的智慧 劉錦秋訳 商周出版 台北 2005
- 8 墨子思想 黃碧君訳 商周出版 台北 2005
- 9 韓非子 江裕真訳 商周出版 台北 2005

これらの書は一般書であるが、翻訳のほうは、一応読むに値する書物として評価されているらしく、「墨攻」なる映画が香港で上映されたさい、8が高校の先生向けの「墨子」解説書として梁啓超、胡適のものとともに「もっと新しい書物ならば」こんな本があるとして「明報」に紹介されていた。さらに言えば8や9を参考文献として引用している論文があるのには驚いた。

翻訳

- 1 徂徠集・序類・訳注稿 沢井啓一・岡本光生
(CONTEXTURE 5～12 1986～1993)

まだ若かった沢井啓一（恵泉女学園大学名誉教授）さんが本学に非常勤講師できておられ、かれと共同でした翻訳。中心は徂徠研究の専門家であ

られる沢井さんであった。いつか、改訂してきちんとした形にしたいものだ。

4 国際会議のことなど

北京、山東省済南、山東省滕州、山東省棗庄、河南省洛陽、河南省魯山、河南省安陽、内モンゴル包頭、江西省南昌、台北などで開催された国際会議で講演したが、印象に残っている会議、会議のあとの現地踏査が五つある。滕州での会議は、えらく道幅の広い、そして10,000メートルくらい続く立派な、しかし交通量の少ない「道路」に面した郊外のホテルで行われた。35年前はじめて中国にいったとき、地方の飛行場の片隅に空軍の複葉機が置かれていた。これは空軍の重要な軍事機密であるわいと思ったことを思い出すと隔世の感がある。これならなにかのときに最新鋭のジェット戦闘機が離発着できる。南昌での会議のあと、井岡山（もと山賊の住み家。南昌起義に失敗した工農紅軍がここに逃げ込んで根拠地とした。革命の聖地）を踏査することになっていた。「ぼくはそんな場所には関心ががない」とことわっていた中国人学者がいた。棗庄での会議のあと、台児庄の戦跡（日本軍が中国軍に敗れた戦闘だからあまり気分はよくなかった）を見にいかされた。わが日本軍に勝利したのは、当然ながら中華民国陸軍であり、これでは反日教育にはなっても蒋介石憎しの教育にはならないではないか、もっとも第三次国共合作に備えてのことかなと、かんぐったりもした。安陽、ここは袁世凱の故地。皇帝の墓域の様式を持つ墓がある。説明文に「中華民国第一代總統袁世凱之墓」とあった。台湾からきた学者が「これはおかしい」と抗議をしていたし、抗議するのが当然であるが、安陽の人からすると、殷墟などどうでもよく、袁世凱が皇帝になって、安陽のために力を尽してくれていたら、と思っているだろう。内モンゴルの包頭にいったときのこと、「ジンギスカンの墓」に参詣したのだが、途中のバスで「若きジンギスカン」といったたぐいのビデオを放映していた。モンゴル民族主義と中国共産党の本音であるだろう漢族中心主義とがどうおりあいがつくのか、のちに、楊海英氏の「墓標なき草原上・下」（岩波書店2009）を読んでますます考え込んでしまった。

以上がだいたいわたしのやった仕事である。大学、とくに「教養」の「先

生」としてはこんなものかな、と思う。しかし、「知」の新たな地平を拓き、深化させ、人類の「知」の経験にささやかでも貢献をしたかと問われたら、やや忸怩たるものがある。「学者」をつくるとはいえない大学を卒業したんだ、「学者」になろうとしたのが高望みだったのかもしれない、と言い訳しておく。

5 学内での仕事

基礎教育センターの学生委員だの、教務委員だの主任だのをやらされた。不愉快なことも多々あったが、それでも、「俗悪とも見える役割が、ただ俗悪な動機で選び取られたと考えるのは、それ自体ひとつの俗悪心理にはかならない。」(田中美知太郎 「時代と私」 406頁 文芸春秋社 1976) とみずから言い訳をして、それなりに仕事はしたつもりだ。

6 謝辞

すでに書いたことだが、最後の一年を人間社会学部情報社会学科で過ごした。「CONTEXTURE」に執筆するのは越境行為であるが、主任の田中教授、編集委員の斉藤教授をはじめ基礎教育センターの先生方のご好意で古巣の雑誌に執筆することができた。記して感謝する。

35年どうにかこうにかすごすことができたのは、まったく学生の皆さんのおかげといってもよい。記して感謝する。

なお文中、やや筆が滑ったところもあるが、老人の繰り言としてお許しいただきたい。

ぼくが死んだあと、だれか墓参りしてくれるかな、たしか「田舎教師」は教え子の女学生が墓参りした、というような一文でおわっていたはずだ。